

## カタリーナの「失われた名誉(verlorene Ehre)」とは何か なぜ尊厳(Würde)ではなく名誉(Ehre)なのか

武田智孝

### はじめに 名誉と尊厳

*Die verlorene Ehre der Katharina Blum*(1974)〔日本語訳は『カタリーナの失われた名誉』<sup>1)</sup>〕で、気になるのは「名誉(Ehre)」という言葉である。

名誉は、特に世紀転換期以降、身分差別的な名誉(Standesehre)が問題になり、これが決闘と結びついて社会問題化し、ドイツ文学でもしばしば批判的に取り上げられた。第一次大戦終結とともに帝政が廃止になると、身分制秩序も崩壊し、名誉という概念・制度は死滅したかに見えたが、今度はナチスの国粹主義、ドイツ民族至上主義と結びついて、「血と名誉(Blut und Ehre)」、「名誉は理性ではなく血で解決されるべき問題だ(Ehre ist die Sache des Blutes, nicht des Verstandes)」、「民族的名誉(nationale Ehre)」、「人種的名誉(rassische Ehre)」といった形で無残に濫用された。<sup>2)</sup> 戦後になると、忌まわしい過去の記憶に汚染された名誉という言葉は、当然ながら忌避された。ナチスが称揚した名誉は身分的なものではなかったものの、やはり優越・差別化と結びついていて、排他的、戦闘的な概念だった。

ドイツの神学者にして社会学者ヴィルヘルム・コルフ(Wilhelm Korff)は「民主主義社会では名誉の何たるかなど誰が知ろう。」<sup>3)</sup> と言い、アメリカの社会学者ピーター・バーガーは、近代社会についての著書の中にわざわざ「名誉(honor)という概念の衰退について」という補章を設け、そこで、「今日の風習では、名誉は純潔(処女性—引用者注)とほぼ同程度の位置を占めている。すなわち、たとえある人が名誉を主張したとしても、彼はなんら尊敬されることはなく、また名誉を失ったと訴えても、同情を買うよりもむしろ興味の対象となるぐらいがおちである。どちらの概念(名誉と純潔—引用者注)も近代的世界観において

<sup>1)</sup> ハイน์リヒ・ベル(藤本淳雄訳): *カタリーナの失われた名誉* 言論の暴力はいかなる結果を生むか サイマル出版社 1975年。

<sup>2)</sup> Speitkamp, Winfried: *Ohrfeige, Duell und Ehrenmord. Eine Geschichte der Ehre.* Stuttgart 2010, S.173ff.

<sup>3)</sup> Speitkamp, Winfried. ebd. S.222.

は、あきらかに時代遅れの地位しか占めていない。」<sup>4</sup>と述べている。

同じくチャールズ・テイラーも、「社会の階層制度は名誉[概念]の基盤でした。ここで言う〈名誉〉とはアンシャン・レジーム下の〈名誉〉であり、それはその本質からしてさまざまな不平等と結びついていました。この意味での名誉に浴する者にしてみれば、名誉の名誉たるゆえんは、誰もがその名誉に値するものではないという点にあります。(中略)名誉とは本質的に〈優遇〉の問題なのです。」<sup>5</sup>と書いている。

名誉に代わる新しい時代にふさわしい概念として、バーガー、テイラーともに「尊厳(dignity)」をあげ、これは万人に生まれながらに平等に備わるとしている。

「こうした名誉の概念とは対照的に、わたしたちには尊厳という近代的な概念があり、生まれながらの〈人間の尊厳〉や〈市民の尊厳〉について語るときのように、今日ではこの概念は普遍主義的かつ平等主義的な意味で使われています。その基礎にあるのは、誰にもひとしく尊厳があるのだという前提にほかなりません。こうした尊厳の概念こそは民主主義と両立しうる唯一の概念であり、それゆえにまた、かつての名誉という概念が片隅に追いやられてしまうのも致しかたないことでした。」<sup>6</sup>

名誉が既にこうした状況にあるにもかかわらず、20世紀後半も四半世紀を過ぎるころになって(1974)、そこに扱われるのは「身分的名誉」とは異なるものの、民主主義者にしてカトリック教徒のベルが何故わざわざよりによって名誉などという時代錯誤とも取られかねない言葉をあえて小説の表題に用いたのか。

ベルは10年後の後書きの中で、カタリーナは「その名誉を、その尊厳を失った」(S.142)<sup>7</sup>と、名誉を尊厳と同格的に、あたかも名誉を尊厳と言い換えるかのような、それら二つの語に互換性があるかのような書き方をしている。だが、それなら表題に「名誉」ではなく「尊厳」という語を使ってもよかったはずだが、しかし、表題のみならず本文にさえ、尊厳は一度も出て来ないばかりか、それとは対照的に名誉はタイトル以外に4回出て来る(そのうちの一つは *ehrenwert* という派生語だが)。こうなると、小説を書いた時点でのベルには名誉という語への思い入れがあったと考えざるをえない。

主人公は言葉・表現にこだわる。言葉使いに潔癖と言っていい。取調官たちの嘲りや失笑をよそに、*zärtlich*(優しい)ではなく *zudringlich*(しつこい)だ、*nett*(親切な)ではなく *gütig*(慈しみ深い)だ(S.29f.)、と言いつけるばかりではない。警部バイツメネに対する不信と反感も、シンブンに対する怒りも、言葉使いの汚なさ、いやらしさ、ずさんさ、けがらわ

4 ピーター・バーガー他(高山真知子他訳)： 故郷喪失者たち 近代化と日常意識 (新曜社)，1985，95 頁。

5 チャールズ・テイラー(田中智彦訳)： <ほんもの>という倫理 近代とその不安 産業図書 2011 年 63 頁。

6 チャールズ・テイラー：前掲書，96 頁。

7 Böll, Heinrich: *Die verlorene Ehre der Katharina Blum oder: Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann.* dtv 1976, S. 36. 以下，作品からの引用は(S. 数字)で示す。

しき、に対する悪寒じみた嫌悪感から来ている。この小説自体が現代のマスコミだけでなく、市民社会に垂れ流される汚物のような言葉や嘘偽りに満ちた言説、不正確で誠実さのかけらもない言語使用に対する憤りの書と言っても過言ではない。

そうであるからには、表題の「名誉」には然るべき根拠があると考えべきだろう。

10年後のベルが何と言おうとも、尊厳では言い足りない、それには収まりきらない何か名誉にはある、少なくとも小説創作時にはそう感じていたからこそ、表題にも名誉を使ったにちがいない。「尊厳」では捉えきれない、「身分的名誉」とは異なる、この「名誉」に独特の意味合いとはいったい何か。

## 1. 名誉の喪失は社会的な死---名誉は社会的生命

先ず小説のあらすじをおさらいしておこう。

ヒロインのカタリーナ・ブルームはいわゆるお手伝いさん、27歳、バツイチ。親戚のダンスパーティーに招かれ、ルートヴィヒという青年と出会って、たちまちにして魅かれあい、そのまま我が家に同伴して一夜をともにする。実は、彼は銀行強盗と殺人の疑いまでかかった極左テロの容疑者で警察に尾行されており、カタリーナの住むアパートは武装した警官隊に包囲されていたのだが、何も知らない彼女は、彼が国防軍を脱走して、今から国外に逃走するところ、と聞かされ、秘密の抜け道を教えて、逃がしてやる。裏をかかれた形の警察は彼女をテロ容疑者逃走幫助の疑いで連行して、事情聴取する。

問題は、大部の売り上げを誇る大衆紙「シンブン(ZEITUNG)」が翌朝から連日トップで「強盗の情婦(RÄUBERLIEBCHEN)」(S.36)「人殺しの花嫁(MÖRDERBRAUT)」<sup>8</sup>(S.39)といった大見出しと大判の写真入りでカタリーナ・ブルームについての煽情的な報道を繰り返したことだ。焦点は性と政治で、<sup>9</sup>彼女はルーズな娼婦的女性であり、極左テログループの一味だとされ、彼女の育った家庭環境が暴かれ、両親や兄までも曝しものにされる。記事は、大方が歪曲と捏造による誹謗中傷で、警察による取り調べの内容が、シンブンに筒抜けになっているのも問題である。彼女の家には連日連夜匿名の電話や郵便物による嫌がらせが続き、生活は破壊される。シンブンの記者は、手術直後で絶対安静を要する彼女の母親に、医師から固く禁じられていたインタビューを卑劣な手段を使って強行して、母の死を招いたうえに、娘カタリーナの犯行を知った故のショックで母親の死が早められたと報じる。カタリーナは、約束していた個人的インタビューに現れたその記者がなれなれしく近づこうとするところを、用意していたピストルで撃ち殺す。

この小説の刊行直後、表題に「失われた名誉(verlorene Ehre)」を持つもう一つのドイツ文学作品、シラーの『失われた名誉ゆえの犯罪者(Der Verbrecher aus verlorener Ehre)』(1792)

<sup>8</sup> ベンケルザングの中にはこのような題のものがある。

<sup>9</sup> ベルはシンブンのモデルとなった大衆紙 Bild の報道ぶりを Springer-Polit-Porno-Krimi と呼んでいた。

との影響関係が指摘されたが、ベルは「まったくの的外れ」と、強く関連を否定した。<sup>10</sup> しかし筆者の関心は名誉という言葉にあるので、シラー作品で名誉がどういう意味で使われているかを、ここで見ておきたい。

主を失って落ちぶれた旅館の一人息子クリスチアン・ヴォルフは貧しく、容貌が醜いので、恋人から相手にされない。歓心を買うため領主の狩猟場で密猟して得たお金で贈り物をするが、恋敵に密告されて、牢に繋がれる。釈放後は、立ち直ろうとしても、前科者として市民社会から排除され、堅気の職にも就けないまま、密告した相手を殺害し、森に逃げ込んで、ついには盗賊団に加わり、その首領となるが、最後は斬首の刑によって果てるという物語である。時代は18世紀半ば。

よく知られているように、かつては貴族など身分の高い人たちにだけ名誉が与えられ、その名誉を守るために決闘をする資格(Satisfaktionsfähigkeit)が認められていた。侮辱を受けても、その恥辱を雪ぐために決闘しなければ、名誉を失ったとみなされ貴族社会から追放された。名誉は上流社会の一員であることを示す身分証のようなもので、名誉を失うことは社会的な死を宣告されるに等しかった。名誉は社会的生命であって、生物学的な命に代えても守らねばならないものとされた。

こういう貴族的な名誉の他に、18世紀後半までは、その一段階下に、一般市民と賤民とを区別するもう一つの名誉があった。「市民的名誉(die bürgerliche Ehre)」である。当時は賤業に携わる賤民がおり、彼らは「名誉なき人々(unehrliche Leute)」と呼ばれた。unehrlichは今日では「不正直な、誠意がない」という意味だが、当時は「名誉を持たぬ、賤しい」という意味にも用いられた。「市民的名誉」は市民社会の一員であることを証明するパスポートだった。いったん犯罪者の烙印を押された者は名誉を失い、市民社会から放逐されて、賤業以外の職に就くことを許されなかった。これもまた社会的な死を意味する。„Ehre verloren, alles verloren“ (名誉を失えば、すべてお終い)という諺はこの間の事情を表したものである。

シラーの主人公ヴォルフが犯した最初の犯罪は些細なものだったが、それによって市民社会の身分証ともいえるべき名誉を失い、しだいに誇りや羞恥心をもなくしてしまう。「人々は皆、まるで毒蛇かなんぞのように私から逃げましたが、私はついには羞恥心を捨て去りました(verlernt, mich zu schämen)。(中略)私に残された最後の逃げ道は名誉なしにやってゆく術を身につけることでした」[傍点引用者]<sup>11</sup>と主人公は言っている。「名誉なしにやってゆく」とは、市民社会への仲間入りを諦めるという意味と、誇りも羞恥心も捨て去って、という意味と、両方である。市民社会から追放された彼は本格的な犯罪者への道を転がり落ちるしかなかった。シラーの小説は、犯罪者更生の道などまったく用意されていなかった

<sup>10</sup> Bellmann, Werner; Hummel, Christine: *Erläuterungen und Dokumente. Heinrich Böll: Die verlorene Ehre der Katharina Blum*. Stuttgart 1999, S. 62.

<sup>11</sup> Schiller, Friedrich: *Der Verbrecher aus verlorener Ehre*. Stuttgart. 1997, S. 12.

た当時のあまりにも非寛容な市民社会と、市民と賤民を分け隔てる壁としての硬直した名誉の仕組みとを批判したものである。

イエツイオルコウスキという研究者は、ベルの小説が題名からして既に大衆芸モリタート、あるいはベンケルザングの伝統を踏まえていることを指摘している。ドイツ流瓦版とも言うべきベンケルザングで、町娘や女中の「失われた名誉」と言えば、最もポピュラーな題材の一つだった。大道演歌師は、「名誉(処女性)」を失って娼婦に身を落とした哀れな娘の身の上とか、赤ん坊殺しで首を刎ねられた女中の話とかを、大衆の好奇心を刺激し、シャーデンフロイデ(他人の不幸は蜜の味)を味わわせるように、紙芝居形式で扇情的な絵図を指し示しながら、節をつけて唄い語り、最後に取ってつけたような戒めや教訓を付け加えて締めくくる。ベル小説の女主人公カタリーナが家政婦、ハウスキーパーであるのは偶然ではない。これは昔ならまさに女中である。ベルはこの構図を逆手にとって、大衆紙「シンブン」が大道芸人さながらに大衆の卑俗な関心を煽る、昔と変わらぬ手口、からくりを暴いて見せた。更に、中世英雄叙事詩に謳われた「名誉」、貴紳たちを決闘へと向かわせた「名誉」、ナチ時代に乱用された民族的誇り・国家的面子としての「名誉」、といった古い語義を洗い去り、「名誉」を新しい時代にふさわしい「人間的尊厳(humane Würde)」として蘇らせた、と論じている。<sup>12</sup>

一見もっともな説と思えるかもしれないが、名誉と尊厳をあまりにも安易に同一視しすぎるきらいがある。西欧では当然すぎることのためか詳述されていないが、誘惑され捨てられて「処女性の名誉」を失った娘がなぜ娼婦に身を落とすしかなかったかといえば、「名誉(処女性)」を失った娘は、前科者のヴォルフ同様、堅気の市民たちの社会から締め出され、商売女として暮らしを立てて行くほかなかったからである。未婚のまま母親になった娘は、名誉(一種の市民権)を失った者の過酷な運命を怖れて、(処女性の)名誉喪失の発覚を防ごうと嬰兒殺しの罪を犯したのだった。繰り返すが、名誉の喪失は市民にとっても社会的な死を意味した。

現代では犯罪者更生の道はある程度整備され、「処女性の名誉」などもはや存在しない。しかし、ショーペンハウアーの言う「われわれの価値についての他人の判断」、評判(Ruf)としての「名誉」は依然としてある。これをけっして侮れないのは、他人の評価や世間の評判が我々に対する彼ら(世の中)の態度と処遇を決定するからである。評判(名誉)はそれゆえに強大な(影響)力を持つ。<sup>13</sup> 中傷記事の結果、カタリーナが大量の脅迫電話、手紙、電報の攻撃に曝され、「パン助(Nutte)」呼ばわりされ、嫌悪と好奇の目で見られるだけではない。彼女の雇い主であり弁護人であるブルルナ博士夫妻の実生活にもシンブンは決定的な作用を及ぼす。小説はその実態を正確に捉え、描くことを忘れていない。

<sup>12</sup> Jeziorkowski, Klaus: Die verlorene Ehre der Katharina Blum oder: Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann. In: *Interpretationen. Heinrich Böll. Romane und Erzählungen*. S. 249-268, Stuttgart 2000, S. 256ff.

<sup>13</sup> Schopenhauer, Arthur: *Aphorismen zur Lebensweisheit*. Insel Taschenbuch 1976, S. 68ff.

彼らはカタリーナの単なる雇い主に過ぎなかったかどうかを疑われる。テロ容疑者ゲッテンの逃亡を助ける際カタリーナが暖房用ダクトを利用したのは、住宅団地の建設に関わった建築士のブロールナ夫人が秘密の図面を教えたためとされ(彼女はかつて設計図をカタリーナに見せて説明したことはあったが、テロリストのシンパではないし、むしろ逃亡に手を貸したわけではない)、背任の罪で、それまで指導的な地位にあった建設会社を解雇されそうな雲行きになる。博士号を持つ有能な夫人が今や思い切りレベルを落として、新しい就職先として高級家具店の「インテリア・アドバイザー」を志願するが、顧客はもっぱら上流社会の紳士淑女なので、「赤いトルーデ(ブロールナ夫人はシンブンに散々そう書き立てられた)」(S.84, 115)では具合が悪いと、体よく断られる始末である。有能な弁護士ブロールナ博士は、カタリーナばかりか左翼の政治犯ゲッテンの弁護まで引き受けることにしたため、国際的な活躍の場から降ろされ、クレーム処理担当の三流弁護士へと格下げされる。質屋通いの現場を写真に撮られ、経済的に落ちぶれつつある様が、富裕な左翼知識人の落魄ぶりを揶揄する調子で報道され、瀟洒な博士がもはや身なりをかまわなくなり、体臭、いや、口臭さえも漂わせるに至る。

Ehrverlust(直訳は「名誉喪失」)は、1969年の刑法改正で廃止されるまでは、公民権喪失を意味した。しかし名誉の喪失(悪評)は、今日でも実質的には、当事者を市民社会から追放し、社会的な死をもたらしかねない。時代は変わっても、名誉(良い評判・社会的信頼)は依然として市民社会のパスポートである。この一点において、ベル作品の「名誉」は伝統的な意味を引き継いでいる。

シラー作品では「賤民(unehrliche Leute)」の存在に象徴される身分の隔壁としての名誉が問題だった。「名誉(市民社会の身分証)」を持たぬ者は人間以下の扱いを受けた。人間の尊厳を踏みにじっていたのは、名誉の崖で隔てられた身分制社会の非情な仕組みである。ベル作品の場合、きっかけは犯罪容疑者逃亡幫助の罪だが、これによってカタリーナの名誉が失われるわけではない。彼女の名誉(社会的生命)を抹殺するのはマスメディアによる誹謗中傷報道である。シンブンは人間としての彼女の尊厳を踏みにじったと言えるが、失われるのはあくまでも名誉であって、尊厳ではない。尊厳は誕生(受胎)と同時に人間に備わり、<sup>14</sup> 遺体や遺骨においても認められるものである。

カタリーナは、シンブン記者の強引なインタビューによって母がいわば殺された後、憤慨する担当医に向かって、「あの連中は *Mörder*(人殺し)であり、*Rufmörder*(誹謗中傷による人殺し)です。軽蔑すべきなのは勿論ですが、きっと罪のない人間から名誉と評判と健康(Ehre, Ruf und Gesundheit)を奪い去るのがこの手のブンヤ連中のシゴトなのでしょう。」[強調引用者](S.106)と言っている。カタリーナは名誉と評判を並列し、中傷記事を載せるシンブン記者や編集者を *Rufmörder* と呼んでいる。翻訳では *Rufmörder* は「社会的生命を抹殺

---

<sup>14</sup> Speitkamp, Winfried: ebd. S. 18.

する人たち」<sup>15</sup>と、適切に訳されている。

## 2. 社会的人格・アイデンティティとしての名誉

「われわれの価値についての他人の判断」としての評判・名誉が現代社会でも恐るべき威力、影響力を持つことについては既に述べたとおりである。しかし、カタリーナがシンブンの煽情的な中傷記事と、それに刺激された購読者大衆からの匿名電話や郵便物の攻撃に曝されて、荒れ狂い、小さなホームバーから次々と酒瓶を取り出しては壁に投げつけて壊し、同じ破壊行為をキッチン、バスルーム、寝室で繰り返す(S.78)となると、そこには更に別の問題が付け加わる。

幼いころから彼女をよく知るヴォルターズハイム叔母は、既にそうなる以前に、カタリーナが今やすっかり打ちのめされ、心の平衡を失い(Verstörtheit)、あれほど愛着の強かった住まいや仕事に対する関心も失くしつつある、自分は心理学者ではないが、これは危険な兆候である。このような虚偽報道の精神的破壊作用に対してあなた方はどう責任を取るつもりか、と警察に詰め寄っている。その際ヴォルターズハイムは、「若い生命の破壊(ein junges Leben zu zerstören)」(S.62)という言い方までしている。

この小説の背景に1972年のベル自身の体験と、1974年、長男ライムント(Raimund)の身に降りかかった出来事があることはよく知られているが、もう一つ、ベル自身も認めているモデルがあって、それは1972年、ハノーファー大学心理学教授ペーター・ブリュックナー(Peter Brückner)の身に起きた事件と、その時の体験を綴った教授の手記(1973)である。ブリュックナー教授はRAF(ドイツ赤軍)のメンバーの一人を自宅に泊めた件で、シュプリング系マスメディアから轟々たる非難を浴びせられた。彼はその時の体験をこう綴っている。「私の周りを似て非なるもう一つの現実が取り囲んだ。いつかどこかの新聞に私についての中傷記事が載ると、それに呼応して日夜を問わず匿名の電話が引きも切らずに掛かり始める。脅迫状が次々と舞い込む。[...] 私は[...]根も葉もない件で批判され、この記事はほんとに私のことなのか、それとも別人のことなのか、と自問したものだ。新しい人物B.が作り出され、私の自己理解とは全く相容れないもう一つの自己像が作り出された。」[傍点引用者]<sup>16</sup>

名誉(Ehre)の歴史について興味深い研究書を書いたシュパイトカンプは、自分が自分について持つ自己像(Selbstbild)と、自分について他者が抱くイメージ(Fremdbild)、自尊心と他人による評価、この二つの一致、それが名誉である。名誉は個々人のアイデンティティであり、間違いなく本人であることの証明である。自分が自分について抱く自己像(Selbstbild)

<sup>15</sup> ハイน์リヒ・ベル(藤本淳雄訳)：前掲書、157頁。

<sup>16</sup> *Interpretation zu Heinrich Böll „Die verlorene Ehre der Katharina Blum“*. Königs Erläuterungen und Materialien. Hollfeld 2009, S. 17f.; 同引用は Bellmann, Werner und Hummel, Christine: *Erläuterungen und Dokumente. Heinrich Böll: Die verlorene Ehre der Katharina Blum*. Stuttgart 1999, S. 36 にも見られる。

と、自分について他者が持つイメージ(Fremdbild)とが合致しなくなった時、存在の危機が始まる、と述べている。<sup>17</sup>

シュパイトキャンプは何故かペーター・ブリュックナーの体験にもベルの小説にも言及していないが、シンブンの中傷記事と、それに刺激された購読者大衆からの脅迫電話や書状による攻撃に曝されたブリュックナー教授やカタリーナの身に起きたのは、アイデンティティ・クライシスに他ならず、叔母ヴォルターズハイムに、「自分は心理学者じゃないが」[傍点引用者]と断わせた上で、「精神的破壊作用(die Zerstörung und auch Verstörtheit)」(S.62)云々と言わせている背景には、ブリュックナー教授の手記の存在が感じ取れる。

人格(Person)の語源はペルソナ、即ち(仮)面であり、社会に向けられた個人の顔、役割である。この社会的人格において個人と社会が会う。自己像(Selbstbild)からあまりにもかげ離れた贗のFremdbild(自分について他者が持つイメージ)を当人の周囲に張り巡らし、人格的統一を破壊する、これが Rufmord(誹謗中傷)のもう一つの恐ろしさである。英語の character にドイツ語の Ruf の意味があることを指摘したのは他ならぬショーペンハウアーだった。<sup>18</sup> Rufmord は評判殺し、信用破壊である以上に、人格殺人なのである。Rufmord というドイツ語はダテではない。大衆ジャーナリズムによって作り出された偽りの Fremdbild はカタリーナを取り囲み、その圧倒的な力によって、彼女の Selbstbild が押しつぶされそうになり、心の平衡が失われるのである。

興味深いのは、名誉は「時代遅れ」で、「尊厳」こそが「民主主義と両立しうる唯一の概念」と説くアメリカの論客たちのアイデンティティについての考え方がシュパイトキャンプの説と重なることである。

旧い階層秩序の世界では、各個人はそのアイデンティティを社会的な身分、地位、役割の中に見出し、そこから離反することは、アイデンティティ放棄であり、名誉を失うことを意味した。近代民主主義の社会においては、「個人は社会から課せられた種々の役割から自己を解き放つことによってのみ本当のアイデンティティを発見することが出来る。」<sup>19</sup>

「いかなる社会的位置づけをも乗り越えた人間的存在そのものに由来する尊厳を備えた自律的自己」<sup>20</sup> [傍点引用者]、それこそが近代社会の発見した理想であり、テイラーはこれを「ほんもの(authenticity, Authentizität)という理想」<sup>21</sup>[傍点引用者]と呼んでいる。「ほんもの」、すなわち「他の誰にも真似できない自分らしいあり方」は、めいめいが自己の内面に発見し、そこから生み出さなければならない。だが、他者から孤立した状態では不可能である。自分のアイデンティティは、「ときには面と向かって、ときには心のなかで交わされる他者との対話をつうじて」[傍点引用者]定めて行くしかない。「他の誰にも真似できない」

<sup>17</sup> Speitkamp, Winfried: ebd. S. 17.

<sup>18</sup> Schopenhauer, Arthur: ebd. S. 69.

<sup>19</sup> ピーター・バーガー：前掲書，104頁。

<sup>20</sup> ピーター・バーガー：前掲書，109頁。

<sup>21</sup> チャールズ・テイラー：前掲書，63頁。

「ほんもの」の自己, 真のアイデンティティ, 自分固有の社会的人格を確立するためには, 他者との対話をとおして, 他者の, 特に重要な「他者の承認(Anerkennung)」[傍点引用者]を得ることが必要である, とテイラーは説いている。<sup>22</sup>

カタリーナが考えうる最悪の家庭環境と, そこから逃れるために早まってしてしまった結婚の失敗とから, 一途な向上心と努力とによって, 彼女を理解する叔母や雇い主の援助を得ながら夜学にまで通って, 上級ハウスキーパーの国家資格を取り, 雇い主たちの信頼と尊敬を得るまでに至る道のりは, アメリカ人学者たちの言う近代社会におけるアイデンティティ確立の道筋にぴったり一致する。アメリカの論客たちの用いる英語の honor はもっぱら身分差別的な旧い社会の遺物で, ドイツ語の Ehre のように社会的人格, アイデンティティ, 社会的生命といった意味合いはないようだ。しかし彼女が重んずる「名誉(Ehre)」は身分制社会のお仕着せではなく, 他者との対話の中で, 「重要な他者」の承認を得ながら獲得した社会的人格, 彼女独自のアイデンティティにほかならない。

テイラーは更に, 「他者の承認」が重要なだけに, 他者・社会によって意図的に承認が拒まれ, 「劣ったイメージや卑しいイメージを投影されると, そうしたイメージが内面化されるに応じてほんとうに歪められたり, 抑圧されたりしてしまうものなのです。(中略)他人〔のイメージ〕を操作して歪曲すること」<sup>23</sup>は人間的尊厳を踏みにじる犯罪行為だと言っている。彼は民族やグループを念頭に置いているようだが, 個人にも当てはまる。カタリーナの身に起きたのはそのことだ。彼女はシンブンの虚偽偏向報道によって意図的に承認を拒まれ, 「劣ったイメージや卑しいイメージを投影」されて, その社会的人格を否定され, アイデンティティを破壊され, 社会的生命を絶たれたのである。

### 3. 火炎瓶, ぶん殴る, 「ブタ野郎!」

なぜ尊厳ではなく名誉なのか? という理由の一つに, 名誉というものがもともとプライド, 屈辱感, 怒り, 憎悪, 復讐心といった, あまりにも人間的な情念に色濃く裏打ちされているという事情がある。

小説は, 誹謗中傷報道(Rufmord)によって名誉(社会的生命)を抹殺された主人公が中傷記事を書いた記者をピストルで射殺する, と最短要約できる。「ここではあまり血の話はしないようにしよう」(S.10)とわざわざ断っているにもかかわらず, 題名に「暴力(Gewalt)」が使われ, 殺人が行われるだけのことはあって, 内容は至って暴力的で, ざっと数えただけでも, 「暴力」とその派生語が 10 回, 「血(Blut)」とその派生語が 13 回, 「死(Tod)」とその関連語が 17 回, 「殺人(Mord)」とその派生語が 18 回出て来る。

評判や信頼の問題だけなら, 彼女をよく知る人(重要な他者)たちは事件後も態度を変えず, 物心両面で支援するので, 低俗な大衆紙の記事なんか無視してもよかったはずだが,

<sup>22</sup> チャールズ・テイラー：前掲書，65-66 頁。

<sup>23</sup> チャールズ・テイラー：前掲書，69 頁。

彼女の気持ちがおさまらないのは、逆境を乗り越えるために重ねた真摯な努力とその成果をシンブンの中傷報道によって踏みにじられたことへの無念の思いがあるからだ。彼女には「二つの致命的な(lebensgefährlich)性質が備わっている、信義に厚い心と誇り高いところ(Treue und Stolz)」(S.85)とされているように、同じ「失われた名誉(verlorene Ehre)」でも、シラーの主人公とは違って、カタリーナは最後まで誇りを失わない。自分が築いた社会的な人格(名誉)に対する誇りであり、名誉を重んじる心と言い換えることができる。信義と名誉は騎士道に謳われ、『武士道』<sup>24</sup>で賞賛された最も重要な徳目である。それらが命に関わるほど危険(lebensgefährlich)なのは、社会的生命(名誉)が命と引き換えにしても守るべきものと見なされるからである。その伝統は風変わりな現代女性カタリーナの中にもまだ生きている。

荒れ狂うのはカタリーナだけではない。弁護士ブロルナはシンブンの捏造記事の中身を知ると怒り心頭に発して、発作的に新聞社に投げ込むための火炎瓶(Molotow-Cocktail)を作ろうとする。(S.118) そればかりではない。シンブンと手を組んで立場を有利に導き、都合の悪い相手を貶めて平然としている厚顔無恥な有力企業家、彼のクライアントでもあるシュトロイブレダーの横っ面を鼻血が出るほどぶん殴る。(S.129) 100年前であれば、ブロルナ博士が自分たち夫婦の名誉のために、シンブンを裏で操る者たちを相手に決闘を挑んだであろうことは想像に難くない。

更に無視できないのは「ブタ野郎(Schwein)」という悪罵が6回も出て来ることだ。そのうちの4回はカタリーナがシンブンの編集者や記者を指して使っているが、2回は社会的に指導的な地位を占める教養あるブロルナ夫人の口から発せられる。(S.119) しかも電話口とはいえ相手に向かってである。正確には Schwein と Ferkel。Ferkel は「子ブタ」だが、Schwein と同じく「恥知らず」「汚らわしい奴」という意味だ。尋常一様の怒りようではない。ちなみに、ブロルナ夫人トゥルレーデに関しては、彼女が遣る方ない憤懣を鉄面皮なシュトロイブレダーに向けて舌鋒鋭い口撃で爆発させ、実業家があわや夫人の「喉首めがけて飛び掛かろう(an die Kehle zu springen)」(S.96)としたところを押しとどめられるという一幕もある。

名誉が血、暴力、殺人と密接に結びついているのは今に始まったことではないが、尊厳は生々しい個人的感情とも血や暴力や復讐とも無縁、というか、それらを超越した厳粛な概念である。虚偽の言説によってであれ、暴力行為によってであれ、相手の社会的な人格を足蹴にし、相手の社会的生命を抹殺する振る舞いは人間の尊厳を蔑するものであるが、同様に「ブタ野郎」呼ばわりや「ぶん殴る」、ましてや殺人は、相手の人間としての尊厳を重んじることからは程遠い。EU加盟の条件の一つに死刑廃止があるのは、万人(凶悪殺人犯を含む)に尊厳が備わっていて、国家権力といえどもそれを侵すことは許されない、暴力の

---

<sup>24</sup> 新渡戸稲造：武士道 Bushido: The Soul of Japan, IBC パブリッシング株式会社 2009年。

連鎖を暴力で断ち切ることはできない、という信念に基づいている。<sup>25</sup>もしこの小説が「尊厳」云々と題され、尊厳を主題としたのであれば、まったく違った内容にならざるをえなかったはずである。

この小説中の出来事(暴力の連鎖)はあくまで「名誉」の地平で起きていると言わねばならない。しかも名誉回復手段としての決闘が廃れた現代にあつて、中世の *Fehde*(私闘)とか *Rache*(報復)へと先祖返りしている感すらある。ベルの小説が「名誉」を新しい時代にふさわしい「人間的尊厳」として蘇らせた、というイェツィオルコウスキの見解(本論 17p 参照)は、この点からも的外れである。

#### 4. 『基本法』における尊厳と名誉

マスコミによる人権侵害や人格否定から個人を護るための法律が整っていれば、双方からの暴力は防止できたかもしれない。法整備の方はどうなっていたか。

ベルはこの小説の2年前(1972年)に、当時の西ドイツ・ジャーナリズムの右寄りの報道姿勢を批判したエッセイの中で、「人間の尊厳は不可侵である。これを尊重し、および保護することは、すべての国家権力の義務である。」とする『基本法』第一条の条文を引き、人間的尊厳の保護は、容疑者はもとより、他者の尊厳を侵した犯罪者に対しても適用されるべきものである、にもかかわらず、大衆紙ビルトを初めとするシュプリング系各紙による左翼グループに対する人権無視は目に余るものがある、検察当局がこれを放置しているのは許しがたい、と書いている。<sup>26</sup>

しかし報道のあり方を問題にするのであれば、『基本法』には「表現の自由」に関する第五条がある。その第一項には、「出版・報道の自由(Die Pressefreiheit)」が高らかに謳われ、「検閲は行わない」と明記されている。第二項になって初めて、付帯条項の形で、但し、青少年の健全育成と「個人的名誉権(Recht der persönlichen Ehre)」保護のためには、その自由にも制限が加えられる、と記されている。<sup>27</sup> 第五条に「尊厳」は出てこない。報道の自由と対立関係にあるのは「個人的名誉」である。

『基本法』の第一条と第五条を読み比べて気が付くのは、尊厳が人間と結びつき、名誉が個人・人格(Person)と結びついて使われていることである。シュパイトキャンプも、尊厳は誕生と同時に人間に備わっている、いや受胎の瞬間から備わっている根源的な価値であるのに対して、名誉は社会的人間関係の中で初めて発生する権利である。尊厳は恒常的なもので、様々な人権の源であるが、尊厳からどのような権利が導き出されるかは時代によって異なる。現代では名誉は数ある人権のうちの一つである、と言っている。<sup>28</sup> 『基本法』

<sup>25</sup> <http://www.euinjapan.jp/world/human/penalty/>

<sup>26</sup> Böll, Heinrich: Die Würde des Menschen ist unantastbar [In: *Widerstand ist ein Freiheitsrecht...* Kiepenheuer & Witsch 2011, S. 470-477.], S. 471.

<sup>27</sup> <http://www.fitweb.or.jp/~nkgw/dgg/>

<sup>28</sup> Speitkamp, Winfried: ebd. S. 18.

第五条でも、「表現の自由」と「個人的名誉」は、人間的尊厳を基盤とする人権として併記されており、いずれも現代社会における重要な基本的権利ではあるが、尊厳と同一視されてはいない。

ベルはエッセイで、偏向報道とそれを容認する検察の姿勢を批判するに当たって、なぜ第五条ではなく、第一条を拠り所としたのだろう。エッセイには「名誉」の語は一度も出て来ず、「尊厳」のみが問題にされているのはなぜか。対照的に2年後の小説では、シンブン(ビルト紙がモデル)の中傷報道によって失われる「名誉」を中心に据えて、「尊厳」にはいっさい触れていない。

小説にそもそも「尊厳」の語が一度も出て来ないのは、記者テーティゲス対カタリーナという形で個人的関係を前面に出して、個人的な社会的人格(名誉)の破壊、社会的生命(名誉)の抹殺の問題に焦点を合わせたからであり、第二に、先程も述べたとおり、主人公が殺人を犯し、しかもそのことを後悔する気にさえなれないといった内容が、「人間の尊厳は不可侵である」とする『基本法』第一条に矛盾して、この小説が成り立たなくなるからである。他方エッセイでは、具体的な個人の名誉が問題ではなく、より一般的に人権無視の偏向報道とそれを容認する検察の姿勢を批判し、その背後にある、「人間の尊厳」を否定する資本主義社会の構造的な問題をテーマとしたため、ということではないだろうか。

但し、第五条に「表現の自由」と「個人的名誉権」の関係が規定されているにもかかわらず、恣意的報道によって個人の名誉(社会的人格・社会的生命)が抹殺されることへの国家権力(警察・検察)側のあからさまな無関心ぶりはこの小説でも詳細に描き出されている。

カタリーナやその叔母ヴォルターズハイムが中傷報道の無軌道ぶりに抗議したのに対して検事たちは、当事者が「私人訴追(Privatklage)」(S.61, S.65)することならできるが、警察や検察にこれを「刑事訴追する」権限はない、報道の自由は軽々しく侵害されてはならない(daß es nicht Sache der Polizei oder der Staatsanwaltschaft sei, »gewisse gewiß verwerfliche Formen des Journalismus strafrechtlich zu verfolgen«. Die Pressefreiheit dürfe nicht leichtfertig angetastet werden.)と言い、若い検事の一人は、報道の自由と情報源の秘匿を熱烈に擁護したうえ、更に、テロ容疑者などとかかわり合いにさえならなければ(カタリーナは政治に無関心なのだが)、こんなひどい中傷記事を書かれずに済んだのに、と言いつつ。(S.65) それだけではない。その少し前の箇所では別の検事が、カタリーナの手助けでテロリストが逃げ、人々が怒り怯えているのだから、少々のは新聞に書き立てられても致し方ない、と言っている。(S.60)

ベルがエッセイで批判したとおり、国家権力(警察・検察)には、左翼や右翼に加担する者の人間的尊厳など気にもとめず、「個人的名誉権」など擁護する気は更々ない。それどころか警察は内部の者しか知りえない情報をシンブンにリークし、マスコミと手を携えて世論を煽る側にまわっているのである。

## 5. 扇情的虚偽報道の舞台裏

原作には *Wie Gewalt entstehen und wohin sie führen kann* という副題が付いている。*Gewalt*(暴力)は中傷報道のことだが、邦訳では後半の「言論の暴力はいかなる結果を生むか」しか訳されていない。前半は「言論の暴力はどのようにして発生するか」であるが、当然これも重要なテーマのはずである。

エッセイに指摘されているとおり、言論の暴力には思想的偏向があり、現体制を揺るがす左翼に狙いを定めている。

先ず、シンブンの中傷記事の発端となったテロ容疑者逃亡幫助のいきさつから見てゆかねばなるまい。問題は、あの晩のカタリーナの振舞いが皆のよく知る彼女からあまりにも懸け離れていたことだ。普段の彼女は「尼さん(Nonne)」と渾名されるほど異性関係に潔癖で、ダンスは好きなのに、乱脈にすぎるという理由からディスコにも足を向けない。問題のダンスパーティーの晩も、パートナーを連れて来るよう言われた友人たちが、カフェで誰か適当な男の子を見つけて連れて行くと電話で伝えると、カタリーナは驚いて、貴方たちは軽率すぎると諫めたほどである。こういう点に関して彼女は現代娘にしてはお堅い変わり者なのだが、友人がカフェで拾って来たルートヴィヒ・ゲッテンと出会うやいなや、そのカタリーナがたちまちにして彼と打ち解け、一晩中二人でばかり踊っていたのにはびっくりした、と友人たちは口をそろえる。二人が初対面ではなく、昔からの仲間ではないかと、共謀関係を警察が疑う理由もここにある。その夜の彼女の行動は普段とはあまりにかけ離れすぎていて、辻褄が合わない、というのが警察の論拠だ。(S.52)

実際はどうだったか。叔母のエルゼ・ヴォルタースハイムから、お尋ね者に手を貸して、その逃亡を助けるなどというのは立派な犯罪だ、と言い聞かされた時のカタリーナの答はこうだ。「どうしようもなかったのよ、彼こそ私の待っていた人だったの。私はあの人と結婚して、あの人の子供を産んだでしょう、...たとえ何年でも、彼が刑務所から出て来るまで、待たなきゃならなかったとしても。」(S.59)

ロミオとジュリエット並みの運命的な恋とでも言うしかない。卑俗な日常性の域を脱している。彼女はゲッテンという苗字すら警察に事情聴取されるまで知らなかった。恋人どうしは常に名前ですら十分なのだ。キャピュレットだのモンタギューだのは煩わしい限りの障害でしかない。彼女の拘る *zärtlich* は相思相愛、共鳴しあう心を伴った愛で、*zudringlich* は押しつけがましい一方的欲情。元夫や雇い主だった医師や「紳士の客」の場合がそれだ。これを彼女は忌み嫌うが、通い合う心があれば事態は一変する。それがカタリーナ流の操である。しかしこれは取り調べに当たる刑事やシンブンや購読者大衆の常識や卑俗な想像力をはるかに超えている。

ゲッテンが西ドイツの政治や社会の体制と相容れず、兵役を拒否して脱走し、殺人や銀行強盗はしなかったものの、軍の金庫と武器庫を略奪し、国防軍内部の反体制勢力と結んで、何か決起のようなものを企んでいたらしいことは確かのようにだが、政治に無関心なカ

タリーナも、同時代の平均的道德観や価値観からは妥協の余地がないほどかけ離れた生き方をしている。そういう二人が一目で自分たちの同質性を直感して、たちまちにして魅かれあうというのは不自然なことではない。

カタリーナ<sup>ル</sup>ルートヴィッヒのそういう反時代的な異次元性を理解できない苛立ちは反転して当の相手に向けられ、異質で不可解な二人をワルモノ、贖罪の黒ヤギに仕立てて、当時の西ドイツ社会に蟠っていたもやもやした負のエネルギーを、反社会主義、反テロ感情の波に乗せて一気に排出することでカタルシスに導く、ここにはそういう演劇的仕掛けも認められる。

時期はまさにカーニヴァル、スケープゴートの創出と追放の祝祭期間中に小説の時間が設定されているのは偶然ではない。カーニヴァルと言えばもう一つ仮装・変装・仮面があって、日常的アイデンティティからのひと時の解放を楽しむわけだが、ゲッテンとカタリーナだけは変装しない。代わりにマスコミが極左テロ強盗殺人犯の仮面と娼婦の衣装を彼らにお仕着せ、いわば山車<sup>だし</sup>に乗せて町中練り歩いたあげく、門外に追放する。こういう<sup>いにしえ</sup>古のカーニヴァルの習俗が無意識のうちに蘇らされている。

しかもそういうからくりを巧妙に利用する権力者たちがいる。カタリーナのところに時々やってくるという「紳士の客(Herrenbesuch)」(S.31)とその一派ある。

「紳士の客」のことが話題になった時、カタリーナの雇い主ブロールナ弁護士は、自分もあの娘には魅力を感じるけれども、自分はけっして紳士の客となって彼女を訪ねたりなんかできない、彼女への敬意、いや畏敬、愛に満ちた畏敬の念(liebevolle Ehrfurcht)、彼女の無垢(Unschuld)に対する畏敬が邪魔をして、そうできないのだ。あの冷静でありながら真心のこもった独特の人となり(dieses merkwürdige, herzliche Kühle an Katharina)、最悪の家庭環境から身を起こし、計画を立て、人生を切り拓いて来た、そういうカタリーナの生き様を思う時、紳士の客として彼女を訪問するなどという考えは吹っ飛んでしまう。自分は怖いのだ、そんなことをしたら(彼女は、自分をよく知るはずの者から、自分がその手の安っぽい女と見られたと感じ、いたく誇りを傷つけられ、絶望するだろう[補足武田])彼女とその人生を踏み躪ることになりかねない、何しろ彼女は傷つきやすい、とても傷つきやすいのだから、と言っている。(S.87f.) 彼女は、自分の真心からの親切に対してチップを渡されても侮辱と感じるほどの(S.16)、繊細で誇り高い娘なのだ。ブロールナ博士が、「無垢」という言葉でもまだ言い足りない何かがある、と言っているのは、金銭万能で享樂主義的な現代的世相を超えた彼女の異次元性を指していると思われる。

そういう機微を弁えない厚顔無恥なる「紳士の客」というのは、実はブロールナ弁護士の顧客で政界・実業界の大立者アロイス・シュトロイプレーダー(Alois Sträubleder)である。カタリーナにご執心の彼は、ブロールナ邸でのパーティーの後など彼女を無理やり車で自宅にまで送り届けるが、カタリーナは、この映画俳優もどきのイケメン企業家にまったく興味を示さない。彼女は高等教育も受けていない、教養もないが、平均的な現代娘とはまる

で違うのだ。ソデにされ続ける中年紳士は焦って、高価なルビーの指輪を送り付けたり、カーニヴァル休暇の直前には別荘の鍵まで彼女に押しつける。ところが、逃亡した政治犯ゲッテンの隠れ家にこれが利用されたことを察知するやパニックに陥り、泣きついた先の弁護士ブロールナからは散々コケにされる。最後はシンブンや内務省にも顔の利く仲間の大物実業家リューディング(Lüding)に頼んで手を回してもらい、彼の名前は表ざたにならず、逆に鍵はカタリーナに盗まれたもので、彼女はシュトロイプレーダーの別荘をテロリストの隠れ家とすることで、企業家にして保守政治家の失脚を謀り、家庭の平和をかき乱すことを企んだ淫婦であると報道される。カタリーナの後見人であるブロールナ夫妻も左翼だのアカだのと散々に報じられ、ゲッテン逃亡に裏で一役買ったかのように書き立てられる。この虚偽報道の破壊的影響力については既に見たとおりである。

購読者大衆のテロアレルギーと卑猥な性的関心につけ込むことで発行部数を伸ばし、スケープゴートを作って群集心理を煽り、お祭り気分を盛り上げるシンブンの背後には、保守から右翼に至る検察や教会、更には政財界の大立者が控えていて、彼らは情勢を有利に導き、権益を確保するためにシンブンと手を組み、情報操作を行っているのだ。

## 6. 名誉(社会的生命)と尊厳(人命)…小説と映画

根底に構造的・組織的な問題があるからには、インタビューに現れたチンピラ同然の記者をカタリーナが射殺するという結末は的外れの感を禁じえず、これによって体制は微動だにしない。殺された記者やカメラマンの後釜はすぐに見つかり、シンブンの取材が過不足なく続行される様が報告されていて、(S.125, S.130) ひとむきなヒロインの限られた視野を超えた語り手のアイロニカルな眼差しを読み取ることができる。

早くも小説刊行の翌年(1975年)、フォルカー・シュレーンドルフとマルガレーテ・フォン・トロッタによって映画化の運びとなり、ベルはシナリオ作成の段階から積極的に参加して、改変提案にも進んで応じ、結末部分を大幅に書き足した。それは最も重要な変更点の一つとされる。

映画ではインタビューのため彼女の住居に現れた記者のテーティゲスが「イッパツ」云々の前に、ロビーの郵便受けから取って来た手紙や電報をテーブルの上にパラパラ落として見せ、日曜日なのにこんなにたくさん来てるじゃないか、あんたを有名人にしてあげたのだから感謝されてもいいはず、その名前ですっかりお金が稼げる、世間が忘れないうちに早いところグラビア誌に独占記事売り込んで甘い汁を吸わなくちゃ、と言いながらバッグから札束を驚掴みにして取り出し、「ほら、シュトロイプレーダーとのお話(Story)の前金さ…、例の別荘の鍵の一件、シュトロイプレーダー・ネタをいただくじゃないの」と持ちかける。取り付くシマのないカタリーナに、テーティゲスは言い訳のように、シンブンの大見出しは自分が悪いんじゃない、編集の連中があんたのことをちょっとひどく書きすぎた、自分は材料を提供しただけで、あんなえげつない見出しをつけたのは奴らなんだ、俺

のことを恨みに思わないでくれ、俺もあんたも生き延び、乗り越えなくちゃ、と言っている。<sup>29</sup>

映画の制作に当たった者たちはこの場面について熟慮を重ね、編集者も記者もカタリーナも、利益至上主義の巨大機構の中で利用され、搾取されているのだということを表現したかった、とベルは書いている。<sup>30</sup>映画でカタリーナがピストルの引き金を引くのは、彼女の事件も彼女自身も完全に商品化されてしまっていて、どうすることもできないことに彼女が気付かされたためだ、と説明するのである。しかし、そうであればなおさら、ほんの小さな歯車にすぎない一記者をカタリーナが射殺するというのは、やはりおかしい。ベルは殺害の動機としては小説より映画の方が気に入っていたようだが、すべてが商品化される世界で、テーティグスのような使い捨ての手ゴマにすぎない小者なんか殺しても始まらないのは明らかである。

現代社会の構造的な問題を見通せたのは作者や映画監督のような知的レベルの高い人たちだけで、事件の渦中にあり、高等教育も受けていない、無教養なノンポリ家政婦のカタリーナにはそこまでは見えない。作者は早々に主人公の蔵書を紹介することで、彼女の知的関心のレベル、というか限界を明らかにするのを怠っていない。(S.20) 母親の主治医だった医師はカタリーナを коммуニストと勘違いして、シンブン報道のあり方は社会構造から来ていると思うかと尋ね、彼女は何のことか理解できないまま首を横に振る、というシーンもあった。(S.106) カタリーナをして、あくまでも個人的な名誉(社会的人格・社会的生命)にこだわらせつづけ、彼女の社会的生命を抹殺した直接の相手テーティグスの命を奪うという、驚くほど明快かつ古典的な形で、名誉喪失の復讐を遂げさせるためには、彼女を政治的関心とも社会学的知識とも無縁の状態においておく必要があったのだ。

ベルはエッセイで、ビルト紙に広告を載せている数多くの企業と報道の偏向姿勢との関連を指摘しているが、<sup>31</sup>具体的な個々人の背後にある体制や組織を問題にすると、あのエッセイにおけるように、問題意識はどうしても個人的な名誉のレベルに留まらず、非人間的な巨大システムによって構造的に否定される「人間の尊厳」の方に向かうのである。小説も、それ以上に映画も、中傷報道の内幕を描いたり説明したりする部分では、限りなく尊厳のテーマに近づく。それを個人的名誉の問題に引き戻すのは、「信義を重んじ誇り高い(Treue und Stolz)」という「致命的」で古風な性格を持つ現代のクリエムヒルト、政治的・社会的な関心など持たず、ただひたむきで、真面目で、視野の限られたカタリーナなのだ。

既に見たとおり、昔は社会的生命(名誉)を守るために、町娘は嬰兒殺しの罪を犯し、貴紳は命を賭けて決闘に臨み、将校は死をもって恥辱(Schande 名誉の喪失)を雪いだ。社会的生命には生物学的な命と同等かそれ以上の重みがあった。かつての文学はこれを問題視し

<sup>29</sup> DVD Video *Die verlorene Ehre der Katharina Blum*, Ein Film von Volker ARTHAUS.

<sup>30</sup> Bellmann, Werner; Hummel, Christine: ebd. S. 107.

<sup>31</sup> Böll, Heinrich: ebd. S. 476.

た。名誉を尊重するあまり命の尊厳が軽んじられる制度や風習を批判した。

時代は移り、身分を隔てる壁としての差別的な名誉とその弊害はなくなった。現代社会では、名誉はあらかじめある階層に所属する者なら誰にでも与えられているというようなものではなくなった。めいめいが真摯な努力によって、他者との対話を積み重ね、重要な他社の承認を得て、かけがえのない独自の社会的人格(名誉)を築き上げねばならない。それだけいっそう社会的人格・社会的生命としての「名誉」の重みは増したと言える。(プロルナ博士はカタリーナの人柄に対する「畏敬の念[Ehrfurcht]」(S.87)という言葉さえ使っていた。)にもかかわらず、その名誉(社会的人格・社会的生命)が、特に大衆ジャーナリズムにおいては、映画のインタビュー場面でシンブン記者がテーブルの上に撒き散らす紙幣と同じくらい軽く扱われるのだ。

他者の名誉(社会的生命)を抹殺した者(テーティゲス)が自らの命をもってその償いをさせられるという、百年以上も昔に逆戻りしたかのような驚愕の結末によって、この小説は驕り高ぶる現代のマスメディアに警告射撃を行ったと言えようが、教養ある読者はむしろ事件の背後に広がる「構造的問題」(S.106)の方により大きな関心を向けるべきであろう。

最後に、この小説についての不満を述べさせていただくと、有能と言われる弁護士プロルナ博士があまりにも直情径行過ぎて、シンブンの偽りに満ちた中傷報道に怒り狂って「火炎瓶」(S.118)作りを始めてみたり、厚顔無恥な企業家シュトロイプラーの「横っ面に一発お見舞い」(S.129)したりするばかりで、その行動レベルはカタリーナと選ぶところがなく、冷静沈着に情勢を分析し、資料を集め、作戦を練るといった姿勢がいっこうに見られない、これではリアリティーが希薄になるばかりではない。これほど深慮遠謀に欠ける弁護士であれば、企業家たちの信を得るのが難しいどころか、バカにされ、干されるのも無理はない、と思わせる。

カタリーナとゲッテンの弁護を引き受けたプロルナ博士が公判の場では正義感だけでなく、大いに知恵をも働かせて、産業界、経済界、政界、ジャーナリズム、検察の構造的癒着関係と、『基本法』の根幹をなす「人間的尊厳」を踏み躪る支配的権力機構の歪みを暴いてくれることを期待するが、「10年後のあとがき」にもそのことは触れられていない。

快刀乱麻を断つがごとき、というのは論文なら歓迎すべきことでも、通俗娯楽小説とは一線を画する「純文学」となると、そもそも成立しえないのかもしれないが。

## **Warum nicht die Würde, sondern die Ehre?** **Über *Die verlorene Ehre der Katharina Blum***

Tomotaka TAKEDA

Warum hat Heinrich Böll um die Mitte der letzten Hälfte des 20. Jahrhunderts noch die „Ehre“, diesen obsoleten Begriff, thematisiert, und zwar gerade in einer der wichtigsten seiner späten Erzählungen? Die Ehre war seit „*Effi Briest*“ über „*Leutnant Gustl*“ bis zu „*Radetzkymarsch*“ immer stärker kritisiert worden. Nach dem zweiten Weltkrieg wird behauptet: „In der Demokratie weiß niemand genau, was die Ehre ist“, und: „Im Gegensatz zu diesem Ehrbegriff verfügen wir nun über den modernen Begriff der Würde“, die jedem Menschen innewohne, diese sei der einzige Begriff, der mit der demokratischen Gesellschaft in Einklang zu bringen sei. Hier ist von der Standesehre die Rede. Bei Böll ist das zwar nicht der Fall, aber „die verlorene Ehre“ bedeutet auch in seinem Werk immer noch einen sozialen Tod, wie einst in der Ständegesellschaft. Katharina bezeichnet die Leute von der „ZEITUNG“, die sie durch eine Verleumdungskampagne unmöglich gemacht (sozial getötet) haben, als „Rufmörder“, die „unschuldige Menschen um Ehre, Ruf und Gesundheit“ bringen. Der (gute oder geschädigte) „Ruf“ übt einen großen Einfluss aus, indem er das Verhalten der Leute gegenüber Katharina bestimmt. Die Kampagne verursacht auch eine existentielle Krise bei ihr, indem sie ein von ihrem Selbstbild sehr weit entferntes, verächtliches Fremdbild um sie herum installiert und die Einheit ihrer Persönlichkeit zu zerstören droht. In der demokratischen Welt kann man erst durch den Dialog mit anderen seine eigene Identität, seine unersetzliche Persönlichkeit aushandeln. Die Identität des modernen unverwechselbaren Individuums bedarf umso mehr der von den anderen gewährten Anerkennung. „Die verlorene Ehre“, die die difamierenden Berichte der „ZEITUNG“ bewirkt haben, bedeutet nicht nur den sozialen Tod, sondern auch eine Identitäts- und Persönlichkeitszerstörung. Katharina, die die Frage, ob sie „diese ZEITUNGSmasche für ein Strukturproblem halte“, nicht verstehen kann, geht es weniger um das die Menschenwürde verneinende kapitalistische System, das alles, also auch sie und ihren Fall kommerzialisiert, als um den Journalisten, den „Rufmörder“, der sie ihrer Ehre beraubt hat. Die Ehre, die der Mensch erst qua sozialer Interaktion besitzt, ist seit alters her mit menschlichen, allzumenschlichen Gefühlen eng verbunden, wie Stolz, wenn er gekränkt wird, mit Scham, Groll, Grimm und Rachsucht, während die Würde, die dem Menschen qua Geburt oder sogar schon durch die Zeugung gegeben wird, statisch und unveräußerlich und erhaben über alle menschlichen Gefühle ist. Die Erzählung, in der es sowohl verbal wie nonverbal gewalttätig zugeht, wo von „Schwein(en)“, „in die Fresse hauen“, „einen Molotow-Cocktail zu basteln“, „an die Kehle zu springen“, „erschossen“ usw. gesprochen wird, spielt offenbar auf dem Feld der *Ehre*. Wenn deren Titel statt „Ehre“ „Würde“ hätte, müsste die Handlung ganz anders verlaufen. Der Erzähler aber hat nicht versäumt, anzudeuten, dass dahinter ein „Strukturproblem“, nämlich ein den Grundgesetzartikel „Die Würde des Menschen ist unantastbar“ verleugnendes System lagert.